

ふくしまSDGs博

福島県 × 福島民報社（ふくしまSDGsプロジェクト推進コンソーシアム）

取組概要

「SDGsは決して難しい活動ではない」。福島民報社は楽しみながらSDGsを学ぶイベント「ふくしまSDGs博」を9月24、25の両日、行政、団体、学校、企業など約100社と連携し初めて開催しました。2日間で約1万6千人が来場し、未来を自分事と考え、SDGsを実践していく第一歩となりました。



生徒による「ふくしまSDGs博未来宣言」



多くの来場者で賑わうイベント会場

基本情報

代表地方公共団体	福島県
代表民間団体	福島民報社（ふくしまSDGsプロジェクト推進コンソーシアム）
他の連携団体等	郡山市、福島市、いわき市、会津若松市、桑折町、福島県ユニセフ協会、福島相双復興推進機構、ガールスカウト福島県連盟、ふたば未来学園、只見中、福島二中、日本大学工学部、あさか開成高校、学舎石川高校など
カテゴリ	エネルギー対策／地域振興・交流／地域情報・行政情報発信
事業費	
めざすSDGsゴール	
事業化までの期間	2021年4月から2022年9月

取組内容



福島と未来をつなぐトークセッション



翌日の新聞に掲載した未来宣言

この取組で解決した課題	SDGsという言葉は知っていても、どう実践したらよいかわからない。多くの県民はこうした感想を持っています…。人口減少、気象変動、東日本大震災から11年。私たちの住む世界は大きく変わりつつあります。誰もが安心・安全に、そして心豊かに暮らしたいと思っていますが、何もなければその願いを叶えることはできません。一人一人があらゆる社会課題にしっかりと向き合い、解決策を考えて行動する。ふくしまSDGs博を通じ、多くの県民があらためてSDGsの重要性を学び、いつまでも笑顔で住み続けられる福島、誰一人取り残されない世界に向け、新たな一歩を踏み出しました。
解決に向けた手法	若者とともに福島のよりよい未来を考える県民参加型の無料イベントとして、1年以上前から準備を開始。主設計やイベントの在り方を福島県に相談。議論を重ね、県をはじめ、教育機関、各種団体、民間企業と連携し、17のゴールをあえて絞り込まず博覧会形式でSDGsに絡むあらゆる情報を発信することに決めました。さらに新聞紙上でも連日取り上げ訴求効果を高めました。SDGs第一人者の蟹江憲史慶応大教授を招き基調講演と県知事、学生とのトークセッションを実施したほか、教育評論家の尾木ママ、さかなクンなどのゲストがSDGsの重要性を多くの来場者に呼びかけました。中高生が2日間の活動で得たSDGsの学びを「未来宣言」にまとめ閉幕の際に発表しました。内容は翌日の新聞1面トップで取り上げ、県民の機運を大きく盛り上げました。

取組詳細

事業推進上の各団体の役割分担	中・高校、大学と連携し子供たちにSDG s 活動の発表の場を提供したほか、福島県エネルギー課やカーディーラーなどの協力を得て、燃料電池車を4台使用し浪江町産の水素から発電した再生可能エネルギーでメインステージの電源を賄いました。衣料品リサイクル運動、マイ箸運動、マイボトル啓発なども各種団体、企業と一緒に取り組みました。出展企業・団体それぞれがSDG s 活動を趣向を凝らしPRしました。
地域関係者との連携方法	産官学、様々な業種から約100ブースが出展し、SDG s をあらゆる角度から発信しました。地元のT V局3局も出展し、事前告知や会場からの生放送を行うなど、オールふくしまでSDG s 博を盛り上げ、県民に訴求しました。
資金調達方法	各ブースの出展料およびSDG s 博に合わせた新聞特集の広告掲載料など
資金調達方法の補足	初めてのイベントということもあり、ブース出展料、広告掲載料だけではイベント経費を賄えず、ある程度自己資金を投入しました。
事業推進上の課題・工夫	イベントは子供の教育にも主眼を置きました。県内の中学校、高校、大学合わせて13ブース出展いただきましたが、子供たちが参加して良かったと思えるイベントにするよう集客に力を入れ、ステージ発表の場も提供しました。さらには子供から高齢者まで、楽しみながらSDG s を学ぶ機会とするため、幅広い年齢層に人気がある尾木ママ、さかなクン、あばれる君などの著名人の力を借りました。マイ箸運動や地産地消など、食を通じてSDG s を訴えることも考え、県内の農家や蕎麦屋などで組織する、うつくしま蕎麦王国協議会が県内の各地の蕎麦を食べ比べできるという話題作りなど、あらゆる手段でイベントの魅力を高めました。新聞社の特性を生かし、数か月前から告知を開始、イベント見どころ、ブース紹介なども連載し、チラシ、ポスター、SNS、T Vスポットなどを積極活用し周知を図りました。

担当者のコメント

1年以上前から社内でも組織をつくり、さまざまな部局の社員が垣根を越えてゼロからイベントを作り上げました。初めてのイベントで集客も読めず、さらにはコロナ感染拡大の影響も心配されましたが、予想を超える来場者を集め、福島県に根差す新聞社の社業として誇りに思います。SDG s を生真面目で堅苦しく感じてしまう県民も多いのではと懸念されましたが、出展企業はもちろん、参加者のSDG s への意識は予想以上に高く運営側も大きな刺激を受けました。一人一人の小さな行動が積み重なれば、福島や世界を変える大きな力になる。いつまでも笑顔で住み続けられる福島、誰一人取り残されない世界に向けて、ふくしまSDG s 博に集まった仲間とともに、新たな一歩を踏み出したと感じています。



イベント成功「さかなクン」と記念撮影

優良事例応募項目

取組のポイント（3つの視点）	<ul style="list-style-type: none"> ①地方創生SDGsの視点 <ul style="list-style-type: none"> ・出展企業間のBtoBおよび来場者へのSDG s ビジネス訴求 持続可能な地域社会へ ・民間企業や団体に対し、経済活動としてのSDG s 活動を後押し ・観光、農業、水産業など、あらゆる業種によるSDGに照らし合わせた活動紹介 ・県民全体へのSDG s 意識の啓もう ②ステークホルダーとの連携 <ul style="list-style-type: none"> ・福島県（県知事）、福島県総合計画課、エネルギー課、環境共生課が参加。福島、郡山、いわき市長、その他首長も出席。 ・産官学、あらゆる業種、業界が参加し、多くの県民を巻き込んだ大型イベント ・県内外の主要金融機関が出展協力 ・地元の主要メディアを巻き込んだオールふくしまでのイベント開催 ③モデル性・波及性・メディアの特性を生かし、多くの県民にSDG s の情報を発信 <ul style="list-style-type: none"> ・来場者が楽しみながら自然とSDG s の大切さを学ぶ場の提供 ・SDG s 活動の発表の場を提供（SDG s 活動継続の励み） ・子供たちが楽しみながらSDG s を学ぶ場の提供 ・中学校、高校、大学の先進的なSDG s 活動発表の場の提供 ・マイ箸、衣料品リサイクル、再エネ、マイボトル運動などを実践。身近なSDG s 活動の気づきを提供 ・一過性のイベントではなく、メディアとして継続したSDG s 啓もう活動を実践 ・東北最大級のSDG s イベント ・地元の新聞社として、SDG s を積極的に推進する団体や企業の取り組みを継続紹介・応援
----------------	---